

幼児の教育

家庭-保育所-幼稚園

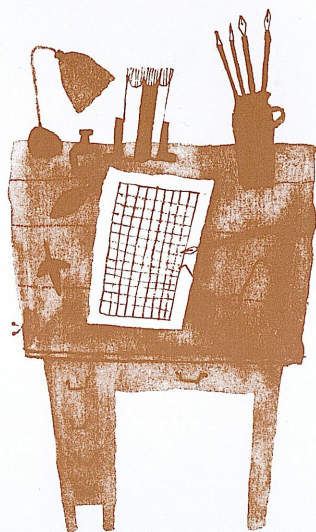
'97年 12月号



倉橋惣三 保育へのロマン

荒井 洌 著

最新刊



「倉橋は決して古くない!」。日本保育界の巨人・倉橋惣三の思想・理論を現代保育の現場に生かす道を明らかにした注目の本。月刊誌「保育専科」に好評連載されたものを中心に書き下し部分を加え、今日の保育現場で使えるように、分かりやすく的確に倉橋理論を解説します。

A5判 220頁 定価 本体2,000円+税

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

第96巻 第12号



幼児の教育 目次

— 第九十六卷 第十二号 —

© 1997
日本幼稚園協会

二十一世紀にむけて幼児教育を考える(16)

幸せに生きる力の「根」を育てる……………岸井 勇雄……………(4)

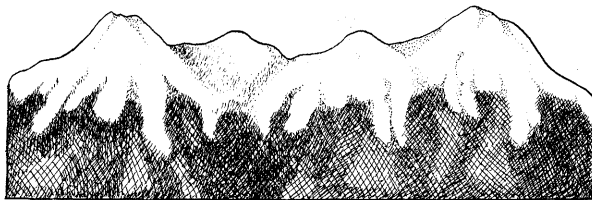
保育学文献賞を受賞して(3)

『教育力の原点』で言いたかったこと……………谷 昌恒……………(8)

「ヘンシーン！」その一瞬に出会うとき……………射場美恵子……………(17)

J・W・トレントJr.著 『精神薄弱』の誕生と変貌』を読む……………津守 真……………(23)

子どもと時間……………芹沢 澄子……………(30)



現象学から保育の世界を見る(5)

生きられる幼稚園空間の二つの次元……………榎沢 良彦… (38)

子どもの生活と福祉の歴史(5) 社会事業的幼稚園……………松本 園子… (47)

ある日の育児日記から(84)……………佐藤 和代… (56)

滄桑の街・香港から(1) 香港到着……………今井 七重… (57)

第九十六巻総目録…………… (61)

表紙絵・小田原千佳子

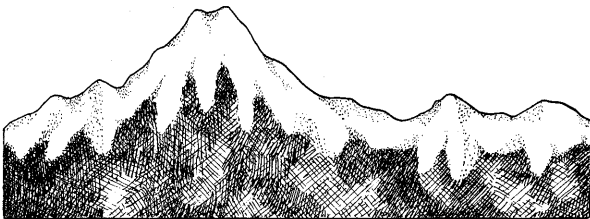
扉題字・津守 真

扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・彌永たたえ「サンタ山」

編集委員／田代 和美・伊集院理子・上坂元絵里

編集部・仲 明子



二十一世紀にむけて幼児教育を考える(16)

幸せに生きる力の「根」を育てる

岸井 勇雄

「二十世紀は子どももの世紀」と唱えたエレン・ケイ、「子どもを太陽系の中心に」と唱えたジョン・デューイに象徴されるスタートを切った今世紀が終わろうとしている。確かに多くの人々の努力によって「子どもの権利条約」などに代表される理念が公認されるようになった前回は顕著なもの

があるが、それを押し流してしまふほどの社会変動が津波のように押し寄せ、二十一世紀がどのような社会になるのか、子育ての環境がどのようなものになるのか、予想しがたい。

その前兆はこの四半世紀に見られ、「落ちこぼれ」に始まり校内暴力、家庭内暴力、いじめ、不

登校、凶悪犯罪や売春の低年齢化やゲーム化、さらには幼児虐待の増加など、心の痛む事態が進んでいる。しかもこれが高学歴化と平行して推移しているのである。オウム真理教のグルの側近に、いわゆる一流大学や大学院を出た知的エリートが多かった事実は、善悪是非の批判力を育てるはずの高学歴が全く無力で、逆に自他を決定的な不幸におとしめている事例であろう。

生涯学習を樹木にたとえれば、幼児教育は根を、義務教育は幹を育てることに該当する。文字通りこれを根幹として、その上に自由に枝を伸ばし葉を繁らせ、花が咲き実がかなるのである。

根は地下にあって目に見えないが、根の張り具合は植物の一生を左右する。まさに人間形成における原体験の意味と重なる。幹は根の上に立つ。知識・技能の

基礎・基本からの系統学習が中心である。保育がわかりにくいのに対して、授業はよほどすっきりしている。根と幹が互いに異なったそれぞれの役割や機能や形態の意義を認識し合うことは、真の幼小連携の第一歩であろう。

人生の各時期にはそれぞれ固有の発達課題があり、それを下から踏み固めていくことが幸せな人生に不可欠であるが、そのためにはそれぞれの時期にふさわしい生活をする必要十分条件である。



乳児は空腹やおむつの濡れを泣いて訴えるたびに、母親やそれに代わる人が裏切ることなくそれに応じ、やさしく声をかけながら授乳や交換をしてくれるという繰り返しの中で、乳児期の発達課題である人間やこの社会に対する愛情や基本的信頼感を身につける。

幼児は大人への依存を保障されながら、自分の内部に育ってきた力を必ず使おうとする。この自発的使用の原理によってさまざまな遊びに熱中し、自分で考え、自分で行動し、自分で責任をもつという自立感、がんばったり我慢したりする自律感、初めてすることはうまくいかないが、何度もするうちに上手になるという有能感などを身につける。特に自然や人に直接触れ、それらと心をかよわせて生きる工夫や楽しさこそ原体験することの意味は大きい。

個体の発生は系統発生を繰り返すという生物学

上の仮説的原則がある。胎内で、原始の海で発生した生命が人類にまで進化する過程が胎児の姿で繰り返されるのである。出生後の成長・発達がまた、人類発達の歴史を踏むことに注目しなければならぬ。人類が文化を獲得するために、最も重要な条件は直立歩行であった。前足が解放されて手になったのである。

物を掴む、振り回す、叩く、投げる、ちぎる、折る、砕く、掘る、埋める、積む、崩す、立てる、倒す、というような作業が可能になり、木や石や土や水などの素材に取り組み、それを使って獲物を捕らえ、衣服を作り、住居を整えるに至った。数の概念にしても、十進法の根拠は両手の指の数以外にはない。

こうした姿は、まさに遊びを中心とする幼児の生活をほうふつとさせるものである。私たちがしなければならないのは、幼児の人間としての原体

験、いわば原始時代の人間が野山を走り回り、物を作り、ルールを定めていったことにも通ずる、個人や集団の原体験を豊かに経験させる環境を構成していくことである。幼児たちはこうした生活の中で、十分な未開時代をゆっくりと経て、着実に文明人になっていく。将来文明に押しつぶされることなく、高度情報化社会の中を生きて文明の主体的な担い手となり、さらによりよい文明の創り手となるための基盤がこうして培われるのである。

小学校以降に学習すべき文化の総量は巨大で、いわば超高層ビルに匹敵する。だから少しでも早く一階に着手しなければと考えるのは愚かだ。底を深く掘り、時間をかけて手抜きなく基礎工事をする必要が、いままでとは比べものにならないほど重要になったのである。

前近代の教育は権力者への依存の教育だった。

近代の教育は自立の教育である。現代が求めているのは自立した個人が連帯して生きる教育である。連帯とは命のつながりを意味する。環境を離れて個体はなく、すべての生命はつながっていることが明らかになった。他者を他人事（ひとごと）と思わぬ愛だけが地球を救い人類に幸福をもたらす。

幸せに生きる力の核心部分が幼児期の原体験にあることを思い、先人たちの献身的な努力によって掲げられてきた幼児教育の灯を一層大きなものにして新世紀につなげることを、持論を繰り返して願わずにはいられないのである。

（昭和女子大学）

『教育力の原点』で言いたかったこと

谷 昌恒

お前なんか学校にくるなと教師が言った。いや、そんなことは言っていない。少年が異常なまでの凶悪な非行をおかした時、そんな問答がありました。中学校の校長が記者団との会見の席にのぞみ、重々しくその事実を否定しました。言ったの、言わないの、何故それがそんな問題になるのかと思いましたが。少し問題がずれてしまっているとも思いました。

お前なんか学校にくるなと教師が言えば、少年は必ず非行に走るのか、走って当然なのか、当然だとみなが考えているのか。何やら不思議でした。少年にはいろいろな問題があったようです。教師は指導に手を焼いていたようです。あの手、この手、手を尽くしていました。さっぱりでした。少年は少しも言うことをききません。教師も人間です、激して、つい、お前なんか学校にくるなと言った。あ

りうると思うのです。父親でも、お前なんか出ていけと言うことがあるのです。いや、教師として、そんな相手を傷つける、とげのある言葉は一切言わない。教師はいつも平静で、寛容で、柔和である。やさしい、理解のある対応をしている。そんなお体裁の、もっともらしい釈明を聞くだけではことはすむまいと思うのです。

教育は教師と子ども、親と子どもの、むんずと組んだ格闘なのです。教師や親だけの独り相撲ではないのです。一対一で切り結んで、一つ一つ、相手の反応に千差があり、万別があるのです。お前なんか出ていけと親父が言った。ああ、出ていってやる。こんな家にいるものと息子が言う。ありうることです。しかし、日頃おとなしい父親が怒った。堪忍袋の緒が切れた。その忍耐が尽きたという事実、子どもを震撼させた。お父さん、ごめんなさい、ぼくが間違っていました。そう言って、全くあらたまる

こともありうるのです。一対一に切り結んで、何かが生まれてくる生命の燃焼が大切なのです。

激して、教師が思わずきつい言葉を投げつけた。はっとして、すまん、すまん、ついひどいことを言って、と教師が詫げる。いや、先生、ぼくが悪いのです。ぼくこそ、生意気なことを言いましたと子どもが詫げる。ありうるのです。急に素直になった子どもの態度に、教師が思わず胸を熱くする。それが教育の現場なのです。

大人はいつもしてやる立場、子どもはされる立場という固定した観点からだけ教育を論じていては教育は死ぬのです。理不尽な仕打ちを受ければ、子どもは深く傷つきます。しかし、どんな仕打ちにも負けるな。それは単なる精神主義でしょうか。「おしん」というテレビドラマがありました。おしんはあらゆる逆境を糧として力強く成長していきました。幼いおしんにさまざまな忍従を強いた大人たちは、

きびしく自らを責めながら、その健気をたたえ続
けました。

お前なんか学校にくるなと教師が言い、少年が狂
暴化した。それは説明の原理なのです。少年たちに
負けるなと励ます。不屈であれ、不撓であれと望
む。それが指導の原則なのです。

* *

『けっばり先生』は山口瞳の名作です。けっばる先
生とは頑張る先生ということですが。猪股校長は私立
の女子高校の校長です。卒業式に「仰げば尊し」を
歌わせないので。猪股先生は卒業式が憂鬱なので
す。自分は至らない人間だ。駄目教師だ。思うこと
の万分の一もしてやれない。子どもたちに何もでき
なかった。一人一人の生徒の前に土下座をしてあや
まりたい。それを、「仰げば尊し」などと歌われたら、
それこそ穴があったら入ってしまいたい心境
だ。そう言うのです。

猪股先生は魅力のある先生でした。誠実で、熱心
な校長でした。生徒の心をとらえて放さないので
す。学生運動の盛りどころでした。高校生までまき
こんで、各所で生徒たちは荒れていました。同系列
の隣の男子高校でも盛んでした。ある日、その男子
校の生徒が大勢で猪股先生の部屋に押しかけてきた
ことがありました。ヘルメットをかぶって、みなタ
オルで固く覆面をしておりました。そんなものは猪
股先生には全く無効でした。ゴチャゴチャ言ってい
る生徒たちに、ホラ、その右に居るのは木村だろ
う。こっちは田中だ。何だ、君は吉田君じゃない
か。一人一人、ピタリと当てていくのです。名前を
言われた生徒は、思わず覆面をとります。下からあ
どけない高校生の顔がのぞきます。みな、間の悪そ
うな、照れ臭そうな顔をしています。やがて、ゲラ
ゲラ笑い出してしまうのです。猪股先生はそれほ
ど、大勢の生徒の一人一人を知っているのです。

しっかりと把握しているのです。

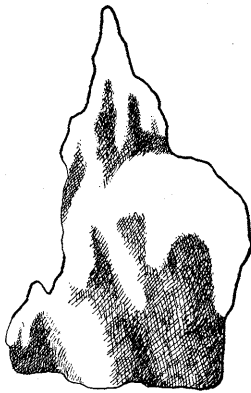
校長に女がいる。そんな噂が立ったことがありません。たしかに、いかにも親しげな女がいるのです。

二人が抱き合っているのを見たという人もいました。教育者としては致命的な噂と言わなければなりません。

女子高校の卒業生で、バーのマダムをしている女です。弟は男子高校に通っています。両親は早く死に、姉が弟を一生懸命育てているのでした。弟に脳腫瘍の疑いがかかります。スポーツに熱中している、時々、わけもなく昏倒するのです。次第に回数が増えてきました。姉さんの頼みを受けて、校長が奔走するのです。医大病院を紹介したり、検査にかたり。本人の弟にはその疑いも深く秘めておこなばなりません。余計、校長の気配りも大変です。一進一退、過度の心労で姉さんが卒倒しかけたことがあります。校長がしっかりと助け起こしたので

す。二人はいかにも訳ありげです。親密にすぎないです。その事情を説明することはできない。校長は弟が知ることをおそれて、どこまでも伏せています。困難を極めた立場に耐えています。これは尋常一様の人間にはできないことです。

猪股先生はそういう人でした。暖かく、深く、自省の人でした。一層「仰げば尊し」は歌わせないのです。この魅力ある人物を山口瞳は実にいきいきと描いています。私たちは感動し、引きずり込まれる



ように読み進みます。教育小説だというのです。しかし、教育小説としてはいかにも不十分です。そこには教師がいるのですが、生徒がいないのです。

生徒はどうしているのですか。ああ、そう、先生は駄目先生ですか。はい、さようなら。そう言っただけでいく。先生はいい先生だったよね。先生にはありがとうと言う。先生、先生の授業つまらなかつた。授業は退屈だった。怒ってばかりいた。いきがけの駄賃に、ぶんなぐってやる。そんな生徒たちでは困るのです。生徒の主體的なかわりが知りたいのです。

先生の授業はよく分からなかつた。だけど先生、とても熱心だったね。一生懸命教えてくれた、ありがとうと生徒が言う。どんな先生にも、それぞれに心を捧げてくれる。そうした生徒のありようがほしいのです。

「けっばり先生」も実はすごく感動的な話の展開が

用意されていました。猪股先生。「仰げば尊し」も歌わせず、さっさと卒業式をすませ、教師たちを連れて校長住宅に引きあげてきます。酒宴がはじまります。私のような駄目校長を戴いて、みなさん、本当によく勤めてくれました。感謝します。先生は本当に涙をポロポロこぼしながら、酒をついで廻ります。

その時です。遠雷か、地鳴りか。突然、ウォーッと街をふるわす大音響が届きます。いつの間にか、手に手に卒業証書の筒を持って、女生徒たちが路地という路地、道路という道路、一ぱいに溢れ、四方から校長住宅をおしついで、一せいに「仰げば尊し」を歌いはじめたのでした。夕闇のせまった町に、その合唱は美しく、高く、響いていきました。「止めろ、止めてくれ」校長は窓をあけて絶叫します。しかし、女子生徒の見事な歌声はそんな嘆願で消すことはできないのです。

校長は歌うなという。その気持ちは深いと思うのです。それでもなお、女子生徒たちは仰げば尊しと歌うのです。教師と生徒、その二つが夫々に生きて、躍動して、教育があるのです。私はそう思うのです。

*

少年の作文があります。題は「おやじさん」。

多くの父は小樽の材木屋で木の皮をむく仕事をしています。その会社に入って二十五年以上になるのに今だに下まぐ、朝から晩まで汗を流して働いている。学歴のないおやじさんは、ただまじめにコツコツとやるということが一番大事なことだと言っていたことを今思い出している。僕は今思う。ほんとうにおやじさんにとってたった一つ僕に教えるものなんだなあ。おやじさんは僕に学校の勉強、掛け算、割り算は教えてくれなかったけれど、男の仕事というのはこんなものだ。僕に見せつけてくれた感じ

です。そんなことを考えるようになったのは最近です。前まではそうは考えていませんでした。

毎日毎日汗だらけになり給料も安月給と、おやじさんをバカにしていた時代もありました。その頃のおやじさんは毎日毎日酒を飲んで来て家で大あばれ、家中足の踏み場もない程ちらばって、そんな時泣きながら逃げたこの僕の小さい頃を思い出し、僕はおやじさんに対し中学生の頃、このバカおやじぶち殺してやりたいと思うこともありました。でも酒さえ飲まないともまじめなやさしい、いいおやじさん。小さい時いつも僕をおんぶして風呂に行き、からだを洗ってくれたおやじ。僕はおやじさんに酒をやめてもらいたかった。僕はおやじさん自体はとても好きだ。でも酒が、酒がおやじさんの人間を変えてしまう。僕は酒がとても憎く感じられた。でも今考えてみると皮肉なようだが、酒だけがおやじさんのこの世のたった一つの楽しみ。でもおやじ

さんは仕事だけはどんなに酒を飲んでもよれよれの二日酔いになるうが、大きな弁当箱ぶらさげて朝早く会社に行った。おやじさん。僕は今こう考える。

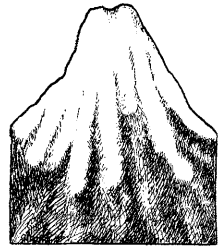
僕は一度社会に出て仕事に就いた。一度は中三の終わり頃、卒業する前に札幌のある会社に勤め、そこをとび出し、一、二か月小樽で一日一食という生活を送り、その時も悪仲間と小樽の盛り場をうろついたり、自分の家の部屋でシンナーをやり、遊び放題遊び、いよいよどうにもならなくなり、ある人の紹介で、また札幌のペンキ屋に勤めましたが、そこも三か月でとび出しました。

そんなことを何度かくり返したのち、いろいろなことが起こり、家庭学校にお世話になることになりました。あの一年前の僕におやじさんみたいな根性、そして意地、一つ所でコッソツ仕事を続ける強さがあれば、僕も失敗しなかったと思います。僕はここを卒業したらおやじさんみたいに、たとえ一生

下まくでもコッソツものを積み上げていけるような人間になりたい。ここへ来る少し前、おやじさんが言っていた。

「陽一よ、おれももう年だなあ。もうあまり酒も飲めなくなってきた。おれも酒が飲めなくなったらおしまいだなあ」と静かに笑いながら言っていた。

確かにあの大量飲んで大あばれしていた時よりは飲まなくなった。でも僕がおやじさんの会社で一緒に仕事をしていた時は、毎夜焼酎をコップにあけて飲んでいたようだ。そんな時ともしつこく話して



くる。あの時はいやだったけれど、今思えば一緒に付き合いたい気持ちがある。焼酎飲んであばれるおやじさん、新聞が読めないのに読めるふりをするおやじさん、掛け算が出来ないのに金の計算がうまいおやじさん、僕の顔を見ると酒飲め飲めというおやじさん。おやじさん。今日も裸電球の下で、一人でコップをかたむけていると思います。

おやじさん。飲みすぎないように。飲みすぎたら見境がなくなるからと自分に言い聞かせてほどほどにしてほしい。今も思い出している。小さい頃おやじさんにおぶさって道を歩いていることを。僕の手にはチョコレートが、おやじさんの手には一升瓶があったことが思い出されてくる。今日も明日もおやじさんは一人部屋で酒を飲んでいる。

少年はすでに四十に近く、家庭を作り、子どももいる。独立して事業を営み、家庭学校の若い卒業生

を使ってきている。文面にあらわれる、少年の日の無頼の一面は容易なことではない。しかし、何と心優しい少年であったことか。家庭学校の濃密な、人間接触の中で、何と深い思いやりを培ってくれたことだろう、いつまでも心に残る文章を書き残して学校を出ていった。

教育は出来るだけ良い環境を与えて、子どもたちやすく育ってもらいたいと願う人間の営みである。その願いに燃えて、国は文教の施策を進め、都道府県、市町村はそれぞれに多額の負担をして教育の施設を作り、親たちは家計の多くを教育に注いでいる。今日、日本の教育諸制度は空前の盛況を呈している。

しかし、私たちはもう一つの願いを持っている。どんな悪い環境にも負けない子どもであってほしいと願っている。環境が悪いのなら、自分でそれを整えていくような創意と勇氣を持った子どもであって

ほしいと願っている。しかし、よく考えてみると、この二つの願いはそう簡単に両立するものではない。むしろ、深く矛盾しているように思う。

何事も練習なのです。練習に練習を重ねて、人間はものごとに習熟できるのです。悪い環境にも耐える。それも練習なのです。しかし、良い環境に慣れた子ども、その練習が十分と言えるか。はなはだ疑わしいのです。

教育は本来的に、この矛盾した願いをもった営みなのです。二つの中心を持った楕円とすべきでしょう。二つの中心を持つ楕円は極度に緊張した曲線なのです。二つを両立させることは可能なのか。

貝原益軒は「人を育てるには三分の飢と寒を存ずべし」と言いました。益軒が言うのではなく、古人がそう言っていると説くのです。子どもは十分に食わせ、十分に着せる、暖衣飽食させては駄目になるのです。健康には腹八分目と言うのです。二分、三

分、その飢と寒さは必要なようです。

今日の教育制度は空前の盛況だと言いました。そして、今日ほど教育が混迷している時代はないのです。何故か。教育の内蔵する根本的矛盾を知らず、ただ、いい環境、いい環境と一方的に思い込んでしまつて、深い落とし穴におちたのです。

『教育力の原点』はこのような趣意を、力をこめて書いたものです。それも理屈としてでなく、現場の事実として書きました。賞を頂けたのは、共鳴して下さった方がいる。それも研究者の中にある。それは私にとって、大へん嬉しいことでした。

(北海道家庭学校理事長)

「へんげん」

その「瞬に出会うとき」

射場美恵子

運動会や、生活発表会などの節目の行事にとり進む過程で、また日々の生活活動の積み重ねの中で、ひとりひとりの子どもが変わり、クラス全体の質的な変化をみるといったことはしばしばあります。そして保育者である私たちにあってそのことは、まさにやりがいを感じるひとときです。

でも、そうした喜びとは別に共に生活する中で、「あっ、今、○○ちゃん このことがわかったんだ」「今、ひとつのりこえたのかもしれない」と子どもの発達の劇的な飛躍の場面に出会えることがたまにあります。もっとも、ひとりひとりの子どもたちが、日々そうした変化の積み重ねを続けていても、たいていは「○○ちゃ

んこのごろとてもしっかりしてきたね」とか
「あれっ、〇〇ちゃんお兄さんになってきたの
ね」といったあいまいな気付きかたしかできない
ことが多いのですが。

「ジュンバン」がよくわかって

いなかったこうすけ君

四歳児クラスのこうすけ君は、一月うまれ。

二歳児クラスに入所した当時は、言葉もあまり
なく、自分の気に入らないことがあると突然バ
タンとおおむけに倒れてただただ泣きわめくだ
け、なかなか気持ちを立て直すことがむつかし
いといった男の子でした。四歳クラスになっ
て、さすがに泣き出すととまらないといったこ
とはなくなりましたが、まだまだ「ジブンガ」
の思いの強さを前面に出すので、友だちとの
関わりもうまくもせず、マイペースの行動がめ

だっていました。

こうすけ君順番ぬかしはる！

二月初旬の給食の準備の時のことでした。月
齢の高い女の子たち数人が、スープの入ったお
なべの横にズラリと並び、「こうすけ君、順番
ぬかしはる！」と怒っています。見ると一番
前には、こうすけ君がお玉とスプーンカップを手
にプーッと怒って突っ立っています。

私は「こうすけ君、順番に並んでたんか？」
と問いました。女の子たちは声をそろえて「並
んだはらへん！」。とにかく早く用意をしたい
という思いで脇から手を出したこうすけ君は、
素直に認められないといった顔で、かたまって
突っ立っています。

「こうすけ君、みてみ、こっちに順番にならん
だはるんや。一人、二人、三人、ほら、こうす
け君この次やんか」と私がいうと、やっと自分

から列の後ろに並びに行きました。でも、悲しくて、くやしくて、声にならない声で涙をポロポロ。手にしたスープカップに溜まるほど涙ができました。自分の順番がきてもとてもその気になれず、結局もっと後まわしになってやっと、自分でスープを入れました。

私は、今までならただ大声で泣いていただけだったであろうすけ君が、口惜しい涙を流してこらえたことに、ひよっとしたら、自分を客観視できたのかもしれないと思いました。

翌日の給食の時、スープなべの前に二番で並んだこうすけ君が後ろに向かって、「おい順番に並ぶんやで！」と声をかけているのです。私は順番ということも、早生まれの幼さを残した四歳児にとっては、いつも人の後ろにつくことであり、意味がよく理解できてないこともあるのだということ学びました。

この後こうすけ君は、急にクラスの生活に目をむけはじめました。当番の仕事やひるね後のゴザの片付けに積極的に関わり出しました。

そして、二月末のやはり給食の準備中のことです。横から割り込もうとしたクラスで一番大きな男の子に、こうすけ君がしっかりした口調で「順番やで！」と注意したのです。はっとしたクラスメートは、素直に後ろにまわりました。まさに、さなぎからチョウになる一瞬のよう



なこうすけ君の変身でした。めったにないこと
だけども、こんな時が保育者冥利につきるとい
う時なのでしょう。

保育所の二歳、四歳クラスの

子どもたち

保育所の二歳、四歳のクラスは、めまぐるしく
発達し気を抜くことのできない〇歳クラス、
発達の大きい節目を乗り越えていく一歳、三歳
クラス、そして保育所の保育の総仕上げとして
位置づけられる五歳クラスとの挟間で、比較的
手の掛からないクラスとして位置づけられてい
ることが多いように思います。でも何度かこの
クラスを担任するなかで、二歳、四歳クラスは
実は、次の飛躍的な発達にむけてのたっぷりと
したエネルギーの充電期であり、ひとりひとりの
子どもたちとじっくり丁寧につきあうことが

とても大切と思うようになりました。

二年続きで二歳クラスの担任をしていて、二
歳から三歳になっていく子どもたちの変わりよ
うに感動を覚えることがたくさんあります。今
年は十一名に保育者が二名といったゆったり体
制なので、ひとりひとりの子どもの育ちが一層
よくみえます。

朝のおわかれがうまくいかなかった、お
しっここのタイミングがあわなくなつて、失敗ば
かりするようになった、いつもうんちを失敗す
るようになった、e t c . . .。二歳クラスにな
ると、今までうまくいっていた事が急に出来なく
なつておとなたちを困らせることがしばしばあ
ります。一歳児の時のたんなる「イヤ」や、だ
だこねではなく「ジブンガ」を強く主張する
「イヤ」なので大人にとってはとてもやっか
いです。

ジブンのことはジブンで決める!

私たちの保育所の二歳クラスでは朝のおやつ
のあと、お昼寝前、お昼寝後の三回、排泄時間
を決めています。

りょう君はこの春入所したばかり。保育経験
はありませんが、おとなのいうことをよくきく
素直な男の子です。お母さんは入所するにあ
たってオムツをとってきました。間隔も長くて
トイレでちゃんとできるようになっています
た。はじめのうちはおしっこのと自分で流す
こともできるし、ついでに手洗い場で水あそび
もできるのでトイレに行くのが大好きでした。
保育所生活に慣れてきて、保育者との信頼関係
もできてきた五月初旬のある日、「お散歩に行
くからおしっこしてきてね」という保育者に
りょう君が「いかないの」というのです。「ぎっ

と途中でいきなくなるよ」という声に耳をかさ
なかったりょう君は、散歩から帰りついたとた
ん玄関で失敗してしまいました。

おひるねの前ももちろんいやがります。無理
にトイレにつれていこうものならそれこそ火が
ついたようにおこって絶対に便器にすわろうと
しません。もちろんすぐあとに失敗するので
す。二、三日りょう君と保育者のそんなやりと
りが続きました。

そしてある日散歩にでかける前、りょう君が
トイレに「いかない」といったあと保育者が
「じゃあ、いいよ。りょう君がいきたくなくなっ
たらいつてね」と言ってみたのです。りょう君は
部屋を走り出ていきました。そして、一分もた
たないうちに再び「おしっこ!」と走りこんで
きたのです。そんな日が三日ほど続いたおひる
ね前「りょう君おしっこいってくる!」とこん

どは自ら宣言してトイレにいきました。

このあと、りょう君は排泄の面ではすっかり自立しましたが、りょう君がジブンで決める”という点ではもつとこだわるようになりました。

ゆいちゃん三歳だもん

やはり同じころ五月に三歳になったゆいちゃんは、ここ数日パンツの中にウンチを失敗します。しかも、失敗したパンツを器用にぬぎすて、すまして便器にすわっているのです。汚れたパンツを洗いながら「ゆいちゃんウンチはトイレでしてね」「だまってないでおしえてね」というと「ウン」としっかりこたえます。

十日ほどそんな日が続いたある日トイレに走りこんでいったゆいちゃんのパンツをたしかめると汚れていません。トイレをのぞくとゆい

ちゃんが便器のそばにすくと立って「ゆいちゃんはウンチはトイレですの。三歳になったから！」とほこらしげにいました。

もちろんこのあと排泄はすっかり自立しました。そしてどちらかといえば、引っ込み思案でおとなしく友だちとのトラブルが起きるとただ泣くだけだったゆいちゃんは「やめて」「いや」をすっかり主張できる元気な女の子に変身しました。

二歳、四歳クラスは全体としては「ヤッター」と思えるほどの劇的な変化はないけれど、年中さわさわとさざ波がたち、ひとりひとりの「自我」がその度に確かな「自我」に育っていく、そんな場面に出会えるのがすてきなと思うのです。

(京都・村松保育所)



J・W・トレントJr.著

『精神薄弱』の誕生と変貌』を読む

津守 真

二十世紀後半、障害をもつ人々の福祉は世界的に変貌しつつある。私の周囲でも、障碍の子どもをもつ若い親たちは、わが子の将来についてこれまでの型にはまったのとは違う在り方を模索し、新しい教育と福祉を作り上げようとしている。そのような時期に、この書物の翻訳が出版されたことは、障碍の意味を問い直すチャンスである。上下二巻の大部の書物であり、私なりの主観的観点から選択して紹介したい（『精神薄弱』の誕生と変貌―アメリカにおける精神遅滞の歴史―上・下』J・W・トレントJr.著、清水貞夫・茂木俊彦・中村満紀男監訳、学苑社、一九九七）。

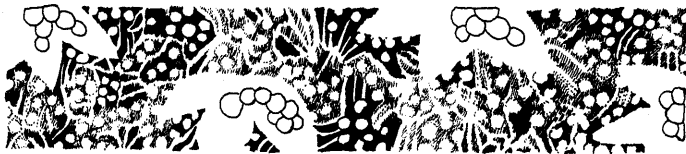


障害は社会的に構成された観念である

精神遅滞は、科学という名のもとに、ケアの提供という名のもとに、社会的コントロールという名のもとに正当化されて来た（上巻 p. 10より）

原著の題名は、*Inventing the Feeblemind: A History of Mental Retardation in the United States* である。「精神薄弱」という語は社会が作り出した構成物であると言ひ、その概念が作り上げられるに至った米国の歴史を豊富な資料を駆使して追っている。著者はこの書物の学問的立場について、「知と社会の歴史を結合させる方法を取りながら、理論的枠組みとしては社会的構成主義と批判社会学の双方」をもとにしたと述べている。子どもの概念は近代の発明であると言ったアリエスの『子どもの誕生』を思い起こさせる。この著者は、「精神薄弱」という概念は「精神遅滞を社会的にコントロールする人達」が作り出したものであると言ひ、

「権力をもつ人々」は、障害をもつ人々をあるときは哀れみ、あるときは恐れ、その人々に隔離した教育と福祉を強制した。「社会の中枢にいる者とそのご用人たちは、自らの専門家としての立場及び当時の政治、社会の現実から判断される合理的な対応を考案し、……：自らが参画しながらコントロールしようとした。彼らは人道主義と科学的精神を結合させて、熟知しているかぎりの最善のケアを人々に提供しようとした」。つまり、人々は、自分たちの生活を守るために、障害をもつ人を排除し、その



上でその人々を保護し管理した。この書物は「そうした構成とまなざしによって生活を変えることを余儀なくされた人々の生の声」（上序章）に耳を傾けつつ福祉の歴史をあとづけようとしている。

施設内適応への道

社会の中よりも、施設内で品行方正な凡庸になることへと変わっていった（上

巻 p. 107 より）

十九世紀後半、白痴教育の使徒と言われたセガン（一八一二—一八八〇）が教育の目標としたことは自立だった。それは一般市民とのかかわりの中でなされるとセガンは考え、そのための教育技術を考案した。しかし、「南北戦争以後、米国社会は産業化が急激に進み、教育訓練を受けた障害者にも居場所がなくなっていた。実際彼等の存在は、社会秩序や生産秩序を阻害するものと見られたのであった。……そして、実際社会の中よりも、施設内で品行方正な凡庸になることへと変わっていった」（上 p. 107）。つまり、施設の中でおとなしい良い子になるという施設病の端緒をもなしたのであった。「セガンは、教育技術の問題に心を奪われ過ぎたため、施設の大規模化をくい止めることができなかった。……南北戦争後、教育によって白痴児を生産人として得ると唱導した人達に、生産人を目指さない恒久保護主義を招来するきっかけを与えてしまった。このような目的の方法と手段への還元は、精神遅滞の歴史において際



立った現象でありつづけた」（上 p. 11）と著者は言う。一九二〇年以降、専門家たちは、障害をもつ人たちを施設社会に適応させるのがこの人たちにとって幸せな道であると考えようになった。（下第6章）そして、隔離された施設の数は増加し、規模は拡張していった。

施設管理者の危機

まもなく彼らは特別な教育機関を保護收容の安息所へと変貌させはじめた。……それは手のかかる厄介者たちを施設という一つの敷地内に保護收容するというものであった（下巻 p. 63より）

社会と家庭の重荷となる人たちを、家庭やコミュニティから隔離された学校で面倒をみることは、人々から喜ばれる事業であった。そして私的なし公的な資金援助を受ける施設長たちは、「その当初から、より専門化された機能を果たすために、建物を増やさなければならぬと考えていた」。「より多くの土地をもつことは、より多くの建物をつくらなければならないことを意味していた。……より多くの生徒がいるということは、当然、それらを管理するために、教師ではない管理職が必要となる。……最終的には、学校が一つの機関としての多様性を増すようになると、白痴児の教育そのものは、他の者たちに任せっぱなしになっていく」（下 p. 63）。「施設長は単なる管理者となり、教育上のニーズよりも施設を効率的に運営することの方に意を注



ぐようになるのである」(上 p. 152)。この点で著者の目は厳しい。福祉も教育も、人間にかかわる仕事だから、対象になる人々が自分らしく生きることに目を注いでいるかどうかが問われている。施設の拡張の方に重点が移ったら順逆転倒である。管理者だれでもおかれる危機である。著者はこのことに頁を費やす。

本書の後半では、施設内部の実態が描写される。一九四〇年以後、第二次世界大戦中、良心的兵役拒否者が軍隊にゆくかわりに施設で働くことを要求された。それは施設の内情をひろく世間に知らせる機会となり、脱施設化の一助となった(下第7章)。一九六八年に至るまで米国の施設は増加を続けた。一九八〇年代より、施設は次々に閉鎖され、あと数年で米国の居住型施設はほとんどすべて閉鎖される。

障害を見る人の眼

終章「愚か者を喜んで忍ぶことについて」(下巻 p. 231)より

この書物は、出来事としての歴史にとどまらず、それぞれの時代を生きていた人の内面の歴史にふれる。著者がこの書物を書いたのは、「この問題と深いかわりをもつ我々自身に対してであり、それによって、反省が促されることを願うからである」と言う。この反省が障害をもつ人たちが蒙っている苦痛と屈辱への感受性を鋭くし、人間としての連帯を生む。もしこの感受性があるならば「我々自身がいかなるものであったかの歴史を書き残さなければならない」(上 p. 17)と著者はいう。福祉の歴



史は、私たち自身が障害を見る眼の歴史である。

著者は、地域福祉か施設福祉かという現代の問いに欠けているものがあると言う。「それは、生産性、利潤、充満する欲望との関係で、意味と価値をことごとく定義し限定しようとする社会では、どのような場所においても知的障害者は搾取されるに違いないということである」。その搾取はだれもとどめることはできないほど、人間に付着している。施設であろうと、作業所であろうと、生産能力によって人間の価値が決まるのではない世界が作られたときに、障害をもつ人たちも市民として社会に参加することができるようになるだろう。「いずれも我々を取り巻く世界の鏡である。……入所施設への回帰は、いかなる障害者にとっても利にならない」。未来について言うならば、知的障害者にのみまなざしを据えるのではなく、この歴史を通して知るように、社会的構成物としての障害の意味を問わなければならない。その場合、障害をもつひとりひとりの人の姿が見えなくなったときには、危険信号である。「未来においては、精神遅滞の問題は、我々自身の問題であり、それは不安を伴いながらも大いなる約束を予感させてくれる」(下P. 243―244)と著者はこの大部の著作を結ぶ。この歴史に示されるように、障害をもつ人の福祉は四十年前とは非常に違ったものになっている。私共自身が障害を見る眼を変えてゆくことができるならば、未来において私共の社会は真の意味で人間的なものへと高められるだろう。そのことを信じたい。



障害という語について

この書物の紹介で、私は原著で用いられているままに「白痴」「精神薄弱」「精神遅滞」等の語を使った。著者は、そのような不快（差別）語を「あえて使ったのは、当時その言葉を用いた人々の感性を伝え、精神遅滞に対して付与された意味をより鮮明にするために他ならない」（上P. 14）と言う。日本語でも、その呼び名については幾つもの変遷を経てきた。私は従来「障害」という語を用いてきたが、この人たちは何も害毒を流していないのに「害」という語を使うのは失礼ではないかと気が付いてから、「障碍」という語を使うようになった。「碍」の字は自分の中につまづく石があるという語感である。私共の眼からその石を取り除けば障碍はなくなる。

この文章を書いている八月の末、毎年この月がそうであるように、私は戦争が終わったときのことを思った。夾竹桃の赤、カンナの赤を見ながら、もう兵隊にゆくこともない解放感を深く味わっていた。それから半世紀、私は幼児教育の歴史と障碍の歴史とが同時に進行している中を歩むこととなった。

子どもと時間

芹沢 澄子

——時計のない環境下で子どもたちは、自分たちの時間をどう使うのだろうか。私たちの実践計画はそこから始まった——

はじめに

いざテーマに取り組んでみるとわからないことだらけ。試行錯誤の連続の末、「時計のない環境」を設定できたのは、ある平日の午前中のたった三時間に過ぎな

かった。その経過を準備調査の段階から実践報告迄をまとめたものは、第五十回目の保育学会で発表されている。

第1報で尾崎は、幼稚園教育の目的そのものを幼児教育者あるいは保育担当者の立場より考察し、保育者自身

の時間意識の中に目的にせまる緊迫した「現在」と「将来」を結ぶ意識が、日常的に欠如していることを指摘している。特に教育の目的という未来において、実現しようとする何ものかに、現在の教育という営みがたえず影響をうけたり動かされることを、私たちは敬遠する傾向があるのではないかという疑問として、大場牧夫の実践論を回想しつつ投げかけた。第Ⅱ報は、幼稚園や保育所で現在使われている教材用物語の中にその作者の時間意識を探ろうとするものであった。言い方を替えれば、教材の中に時間経過をどの程度扱っているものを適当と考えて、子どもたちに提供しているかという保育者の時間に対する意識の実態を探ろうとするものでもあった。

子どもと時の長さ

第Ⅱ報で、飯村は次の様に報告している。

「赤ずきん」のように物語の完結までの時間は、せいぜい三〜五時間というものから、長いものでは「白雪姫」の十年〜十五年、最長のものとして「浦島太郎」があげ

られた。時間経過を直接現わすことばとしては、「ある日」「一日」「翌朝」「次の日」というもので、一年以上を要するものには「三月もすると」（かぐや姫）、「三年間」（浦島太郎）、「何年か経って」（一寸法師）を例に引いている。いずれも現在から未来にかけて、刻々過去に変わってゆく現在からみた未来を示すことばは、ストーリーテリングに緊張感を与える上で慎重に用いられている。しかし、飯村が調べた限りにおいても、多用されている過去を示すことばとして、「きのう」「夕べ」「前の日」があげられる。成人間では、日常的に用いている二日前の「オトトイ」、二日後の「アサッテ」などの表現にぶつかることは、極めて少ない。子どもたちの会話の中でも、又保育活動の中で保育者が用いることも稀であった。今回の実践の終期に近い頃、五歳児集団に対して、具体的事例についてカレンダーを用いて「あした」「あさって」「きのう」「おととい」の意味を理解させたクラスがあり、興味関心を示す子が多かったという。

物語の中には、時計と時刻が重要な意味を担っているものがある。時計がなくては物語が進まないものとしては、十七世紀に書かれた「ガリバー旅行記」がある。ガリバーが小人の国にたどり着き（一六九九年五月四日）、そこに滞在すること九か月と十三日、その島を離れたのが一七〇一年九月二十四日午前六時と記されている。ガリバーは携帯（懐中）時計を携えていたと書かれており、年代、月、日、時間まではっきり書かれている。又、「シンデレラ物語」では、十二時を知らせるという時計が重要な役割りを負っている。日本に一定の時刻に点鐘とメロディーを発する機械式時計（自鳴鐘）がヨーロッパから持ち込まれたのは、一五五一年（天文二十年）というから、その百五十年後のことであれば、ガリバーが小型で携帯可能な時計を用いたこと、城には自鳴鐘といわれる機械時計が置かれていたであろうと想像した。

教材の中で、時や時刻の表現方法は、子どもの発達過程の中で、時や時刻の概念がどのように内面化されてい

るかということと無関係ではなく、相互的であろうと思う。物語が口承文化の時代から現代の児童文学といわれる記録物語になっても、時や時刻を表現する方法は、物語の進展やおもしろさをより容易にイメージできるものでなくては、子どもたちには受け入れられないだろう。

一方、語り部や、物語の作者たちは、子どもたちの未発達な時や時刻の概念を承知の上で創作し、反面その概念発達を促進する方法を凝らしている作者もいたかもしれない。

「かぐや姫」や「浦島太郎」のような壮大な物語を通して、時の概念という発達の最近接領域（ヴィゴツキー）を配慮したり、時や時刻についての常識を超越したところで創作してやれという、隠された意図が働いているとみるのも楽しい。

子どもたちが、「時」又は時間経過をどのように理解し、ことばで表現するかを、いくつかの設問から答えてもらった。それによると、「昨日は新しいですか、古いですか」と聞くと、子どもは「昨日はもう終わったから

古い」「昨日は今日よりも先に来たから古い」と答える子が多い。混乱なく理解し、ことばとしても使うことができる。では「明日はいつ来ますか」の質問に対し、「今日の次の日」と答えた子が圧倒的に多かった。その他「一回寝たら来るよ」「新しく来るのが明日」「夜中の十二時がくると明日になる」「今日から明日に来る」など、時の経過によってやって来るものと理解している。「ではお話に出てくる昔々という昔はいつのことですか」という質問には「ずっと前」とか「ずっと古い」とと答えた。又「死んでいった人が生きていた時」「私たちがいない時」「侍がいた時」「江戸時代のこと」「まだみんなが生まれていない時」ということばの表現から遠く過ぎ去った時というより、身近な人の生死との関連や時代背景といったものに結び付けて捉えている様子が伺える。「では大人と子どもとどう違いますか」の質問に対して「背が高い」と答える子が圧倒的に多く、ベルギーの心理学者ドクロリの年齢観と一致する。又「大人は勉強を教えてくれる」「おかあさんは大人だ

から、お料理が上手」「大人は仕事をするけれど、子どもは遊ぶ」「大人は顔と洋服とやるのが違う」などと、能力差や社会的役割の違いと結びつけた答えも多い。

「では大人になるのはいつ」の質問に対し、「二十歳になると大人になる」「大学が過ぎたら大人に」「お酒やタバコが吸える年になると大人」「結婚してから」など、自分の知識の中から大人にみられる行動様式と対比させた答えであり、時との関連で答えると「まだまだ」とか「ずっと先」のようになる。



又、短い文章の中から、子どもの時間意識について調べてみた。「ウサギとカメが山の頂上で九時に会う約束をしました。ウサギは九時に着きました。カメは九時五分に着きました」。この文章を聞いた後に、①どちらが先に着きましたか②後に着いたのはどっちですかという質問に対し、四、五歳児共に九時の方が早い、カメは五分遅刻したという答え。この程度の設問であれば、時刻と時の経過についてはほぼ全員が理解している。又、③ウサギは何故先に着けたのですか④カメは何故後に着いたのですかの質問に、「ウサギは速く走れるけれど、カメはゆっくりしか歩けない」という速さの違いについても理解されているようだ。又「ウサギは約束の時間を守ったけど、カメは守らなかった」、約束を守る守らないという視点から捉える答えも若干ではあるが得られた。

幼稚園児の時の指導

今までに述べた、時や時刻を幼稚園生活の中で、どのように指導することが望ましいか。筆者はⅢ報で次の通

り、幼稚園教育指導書・領域編自然（文部省、昭和四十六年、フレーベル館）を引用した。「日常生活を通して時刻について興味や関心をもつためには、日常生活の中で時に関する経験や活動をつませることを通して、時刻について興味や関心をもたせるとともに、おぼろげながら時刻というものの意義に気づくようにすることをねらっている。はじめは「おやつです」「おかえりです」などという教師のことばや合図によって、幼稚園の生活の中で時刻に気づくようにし、しだいに、長くぶらんにのったとか、少ししか遊ばないなどと時間に関することさらに関心をもったり『朝・昼・夕・きのう・きょう・あす』などのことばを使って話したり、食事や帰りの時刻などと関連して時計に関心をもつように導く」。

実践計画の準備段階でも、幼稚園時代の幼児の時間概念は、周囲の物事や自分の経験に結びついて形成されていくこと、自分の外に、時の流れを示してくれる時計の在ることは承知しているが、「時計はいつも等しい速さで動いている」ことなどが理解されていないし、時計そ

のものが時間を動かしているように錯覚する時期でもある。

時計のない日

一九九七年一月二十七日（月）の午前九時から午後十二時十五分は、園内外のすべての時計に目かくしを施し、園児たちがどう時を過ごしていくか見守ることとなった。私たち保育者は「時計のない生活」を実施した場合、次の様な事態を予想した。

- 新しい経験活動をはじめらるう
- 通常より早く昼食が始まるらるう
- 園庭では思う存分楽しむ姿が見られるらるう
- 時間制限がない事が不安になる子どももみられるらるう
- 空腹を感じるが、時間を忘れて遊びに熱中するため、その調整ができるらるうか
- 「今、何時」と尋ねられることが多いらるう、答えられない場合、子どもはどうなるらるうか など

当日の朝、「今日は午前中時計が使えません。お弁当を食べる時間は、ひとり決めてください。それまでは先生も時計が使えませんがいつもの通り活動してください」と各クラス共通のメモを用いて園児たちへ伝えた。

そして「時計のない環境下での生活」が始まった。はじめのうちは、園内外で遊ぶ園児たちは、いつもと変わらないように見えた。やがて三十分程経過した頃になると、いつも習慣となっている生活の節目、屋内から屋外への活動の切換え、それぞれ用いた教具の片付けなど、自発的にしたいが、時計もないことが、気になり出すのがわかる。

一方保育室の一隅では年長児A Bと年中児Cは「オセロしよう」と声をかけ合ってオセロの盤と駒を準備した。ジャンケンで順番を決め、AとCが対戦することになった。その間Bは対戦の様子を見ながら、年中児Cの手が進まない時、「あそこにおけば、五つ斜め取りができる」と助言をしながら、Cに次々と駒を渡す手伝

いをする。AはCに負けない自信があるのか、Bの助言を気にすることは無い。Cに向かって「どこに置くの」と催促する。一回戦は三十分を要し、二回戦はAとB、三回戦はBとCという組合せでゲームを行い、この間約一時間二十分を三人は席を立たずにオセロゲームに集中した(写真下)。

同時に手前の机で年長児三人(D・E・F)が将棋を始めた。こちらも三人グループだが、観戦役のFも時々勝負のつき具合を話したり、テレビのアニメのことを話題にしながら進めている。通常は二試合目の途中で時限になることが多い。今日は四回、五回と時間を全く気に留めないで出来る。「まだやっても大丈夫だぞ」(時計を気にせずにできるという意味)、Fが思い出したように園庭の様子を見に行く。「まだみんな遊んでいるから大丈夫」の声にまた将棋ゲームは更に十二時十五分まで続く。オセロも将棋も対戦していない子の役割は、オセロの駒を渡す、将棋の駒を揃える、本を持ってきて目を通したり、迷路のつづきをやりながら、観戦するというよ



▲将棋(手前)とオセロ(奥)の対戦中の子ら。
各々三人は半端にみえるが互いに連携しながらゲームに興じ対戦組合せなどトラブルもなく進む。

り参加しているように見える。オセロでのC、将棋でのFを対戦中の二人が受け入れている様子がわかる。「時計のない日」の終わりを告げる「お昼の音楽の時間です」という放送が流れる。一瞬驚いた顔を見合わせる、片付けと昼食の準備に立ち上がった。

活動期間中に一番多い教師への質問は、「今、何時頃ですか」である。次は「外へ出てもいいですか」「もう片付ける時間？」などの生活の切換え時を尋ねる質問だった。尋ねられる保育者も時計をもっていないので、子どもと一緒に考え、適当に答える外にない。ぶらぶら移動する子が少ないことに気づく。二時間を経過した頃になると、昼食時間を忘れて思い思いの活動に熱中する子が多く、このままどうなっていくだろうかという不安が教師たちの胸中を横切る。「今、いくじ頃と思えますか？」という質問を教師、園児にしてみる。一人だけ時計をもって行動している調査委員によると、やはり成人の方が、幼児よりも体内時計は正確だったようだ。一つの見方として、指導の立場にあり責任を負っている教師

の体内時計は進み加減で、それを補正できる分だけ正刻に近い。いつもにない自由をあたえられて遊びに熱中している幼児のそれは遅れ気味であった上に補正できないのがストリートに出たということであろうか。

おわりに

結果的には、事前の教師の予想はほぼ適中していたといえる。そして、小さな混乱も生じないで、時の経つのも忘れて遊びに熱中できたことは、意外な成果であった。しかし、事前の予想の中に、“時計のない環境下で教師自身、どのように時間を使うか”を深く考えていなかったことが惜しまれる貴重な半日であった。

(銀嶺幼稚園)

生きられる幼稚園空間の 二つの次元

榎 沢 良 彦

はじめに

幼稚園という空間は外部の空間から区切られ、一つのまとまりをもった空間をなしています。一方、内部的には、幾つかのサブ空間に分かれています。わたしたちはそれらに「玄関」「廊下」「クラスルーム」「遊戯室」「園庭」等というように、名前をつけています。これらの名称はこれらの空間の意味ですが、この意味は、子どもたちや保育者がその空間に身を置き、そこを生きているときに体験している意味とは必ずしも一致してはいません。例えば、子どもたちは園庭で遊ぶこともあるし、職員室で遊ぶこともあります。その場合、「園庭」も「職員室」も名称は違っていますが、子どもたちにとっては同じ意味を持っていると言えます。

幼稚園内を区切ってつけられているサブ空間の名称は、それが図面に記入されることもあることからわかるように、わたしたちが実際にそこに身を置いてい

うが、いまいが関係なく与えられている、いわば「客観的な意味」です。それに対して、実際にそこに身を置いているときに体験している意味は、「主観的な意味」と言えます。子どもの行動、振る舞い、経験内容は、この空間の主観的な意味によって左右されています。保育をするということが、子どもたちに何らかの経験を積ませていくことであり、そのときどきの子どもも体験を把握することに基づいているとすると、わたしたち保育者は、幼稚園空間が子どもによって、主観的にどのように体験されるのかを理解する必要があります、かあるでしょう。そこで、本稿では、生きられている幼稚園空間の構造を明らかにするための手掛かりとして、幼稚園空間のもつ二つの次元について考えようと思います。

一、限定的な意味空間

わたしたちは誰でも、いくつもの世界を生きることに

ができます。例えば、「科学の世界」「観念的な世界」「宗教的な世界」「夢の世界」というような世界を。このような世界を、シュッツは「限定的な意味領域」と呼んでいます。^{注①} わたしたちが日常の生活を営んでおり、実践的な行為（労働）を行っているのは、「日常の生活世界」と呼ばれるのですが、それも「限定的な意味領域」の一つです。

限定的な意味領域には、それぞれに固有な認識の仕方があり、その相違によって各領域は区別されます。子どもたちが遊んでいる場合、彼等は大人たちの実践的な労働の世界では矛盾するようなことも平気で行いますから、「遊びの世界」も一つの限定的な意味領域と言えます。さらに、遊んでいるといっても、ごっこ遊びをしている場合と、ゲームをしている場合とは、子どもたちの認識の仕方や論理の構造は異なっていますから、「ごっこの世界」とか「ゲームの世界」というような限定的な意味領域を区分することができ

ます。こうして、子どもたちは幼稚園において、いろいろな世界を生きていると考えることができます。

世界が変われば、それに応じて子どもたちにより生きられる空間も変わります。なぜなら、一つの限定的な意味領域では、その領域固有の仕方で空間が体験されるからです。例えば、同じ遊戯室であっても、遊んでいるときと、終了式のような儀式に参加しているときとでは、子どもたちは異なった仕方でその空間を体験します。「遊びの空間」では、子どもたちはそこに存在する物と戯れることができますが、「儀式の空間」では、物は戯れの対象にはなりません。

このように、一つの限定的な意味領域には、それに対応した空間が生まれることになります。この限定的な意味領域の許で体験される空間を「限定的な意味空間」と名づけることにしましょう。ここで、一つの限定的な意味空間の例を見てみましょう。

場面一 劇の世界になった広間

(一九九五年一月三〇日)

きょうは、年に一度の子ども祭りの日。広間は子どもたちと父兄で一杯であり、ステージが作られ、カーテンが引かれ、照明も用意され、小さな劇場になっている。子どもたちは、すでに観客が待っている劇場へと、クラスごとに並んで入場していく。どの子もきょうの日を待ち望んでいたらしく、嬉しそうな表情をしている。年長児たちは私を見ると、呼びかけたり、私の身体を叩いたりしながら通りすぎていく。いつもなら、私に身体ごとぶつかってくるのだが、きょうは、軽く叩くだけである。ステージの前の席に子どもたちはクラスごとに座り、いよいよ子ども祭りが始まる。年中組の劇が始まる。照明を落としたり、スポットライトを当てたりと、かなり本格的に演出している。子どもたちは自分たちで考えた劇だけに、一所懸命演じようとする意思が強い。友だちの役や演技までよく

わかっている。T夫などは「ちがう。……だ」と、友だちに指示したりする。子どもたちは演じることを意識し、協力し合っている。年少、年長の子どもたちはその劇を食い入るように見ている。歌の場面になると、一緒に歌いだす。観客の子どもたちは完全に劇に引き込まれている。父兄たちも、思わず笑い声を上げたりと、子どもたちの劇を楽しんでいる。

ここでは、広間は小劇場となり、一つの「劇の世界」を生み出しています。もはや、広間はいつものように遊び回る空間ではありません。それゆえ、子どもたちはいつものような行動はしません。きちんと列をなして入場してきますし、指定された場所に座ります。

演じる子どもたちはそこに一つの物語の世界を展開しようと協力し合っています。見ている子どもたちはその劇に引き込まれ、演じている子どもたちと一緒に

なって劇の世界を生きています。歌の場面では、演じている子どもたちと一緒に歌いだすというように、観客の子どもたちは劇の世界を作り上げることに参加してしまっています。それは、広間にいる子どもたち全員が、この広間を劇の世界が生まれる空間（劇の空間）として生きていることを意味します。

広間を「劇の空間」とさせているのは、もちろん、劇場らしく設定された環境でもあります。設定された物的環境が、広間をいつもとは違ったものとして知覚



させ、それが劇の空間に変貌するであろうことを予感させます。しかし、それは予感にすぎません。広間を、本当に劇の空間という限定的な意味空間にするのは、そこに集まる子どもたちと父兄たちです。彼らと共に「劇の世界を生きようとする態度」をとるやいや、広間は「劇の空間」になるのです。つまり、一つの「限定的な意味領域」は子どもたちが態度変更をすることにより生まれてくるのであり、それとともに、空間も一つの「限定的な意味空間」に変貌するのです。

こうして、ひとたび広間が「劇の空間」になると、その空間内の諸物は、それまでとは違った意味を帯びてきます。したがって、子どもたちは普段とは全く違う行動をするようになります。例えば、ステージの前面を突っ切ったり、広間を走り回ったりはしません。そういう行動を引き起こすようなものとして、諸物が存在してはいないのです。子どもたちは自ずから劇の世界を作り上げていくような振る舞いをするようになる

のです。

二、子どもの存在を支える空間

幼稚園空間は、前述のように、いろいろな限定的な意味空間が生まれる空間です。それらの意味空間は、例えば、「劇の空間」「ゲームの空間」「ごっこ空間」等と名づけられるように、子どもたちが何らかの意味ある行動や活動を展開することを前提に考えられます。ところで、「生きられる空間」は、活動の相違によつてのみ構成されるわけではありません。どんな活動をするかという以前に、どのように存在できるかという次元でも子どもたちは空間を体験しています。次の出来事を見てみましょう。

場面二 スイートポテト作りが行われている保育室

(一九九六年一〇月一七日)

三歳児のクラス。昨日、年長児たちが掘ってきたさ

つま芋で、きょうは年少児たちがスイートポテトを作る
ることになっていた。

部屋の中央にテーブルが置かれ、担任のY先生を中
心に、数人の子どもたちが、楽しそうに、潰した芋を
スプーンでアルミカップに盛りつけている。私が入っ
ていったとき、丁度M子がつまみ食いをし、Y先生に
たしなめられ、スプーンを洗ってくるように言われ、
神妙な表情をしていた。

テーブルには七、八人の子どもたちがいて、すぐに
私に気づき、笑顔を送ってくれる。登園した子どもた
ちが少ないので、部屋ではスイートポテト作りだけが
行われている。私は笑顔で、「おいしそう。みんな
コックさんみたいだね」等と話しかける。T夫は
「きょう、誕生日みたいだね」とみんなに向かって言
う。自分で作ったスイートポテトを私に見せてくれる
子もいる。後から登園してきた子どもたちも、みんな
テーブルに来ては、興味深そうにのぞき込み、参加す

る。

Y先生にたしなめられてしょんぼりしていたM子
は、長い時間スプーンを洗っていたが、やがてテーブ
ルに戻ってきて、「スプーン洗った」と報告する。Y
先生が「Mちゃんもそのスプーンでスイートポテトを
作って」と頼むと、M子は再び加わり、明るさを取り
戻す。

この保育室では、子どもたちは後で実際に食べるス
イートポテトを作っていました。子どもたちは楽しん
でいますが、「料理ごっこ」をしているわけではあり
ません。彼等は「料理」をしています。ですから、当
然、遊びとは違った行動をしなければなりません。例
えば、素手でポテトをこねたり、粘土遊びの皿に乗せ
てたりしてはいけません。したがって、スイートポテ
ト作りをしている子どもたちは、この保育室を「遊び
の空間」としてではなく、「料理作りの空間」として

生きていけると言えます。

M子は最初、他の子どもたちと同じように、スイートポテト作りを楽しんでやっています。ところが、Y先生にたしなめられたために、それまでの楽しさが消え、沈んだ表情になってしまいました。「料理作りの空間」は、子どもたちにとっては「楽しい雰囲気」を帯びた活動の場」でもあったのですが、M子はその場から締め出されてしまったのです。M子の周りの子どもたちはみんな楽しい気分を共有しているのに、M子だけがその気分を共有できません。M子はその場に相応しい在り方ができなくなっているのです。それゆえ、当然のことながら、何もすることができなくなっています。

この日の朝、保育室ではスイートポテト作りだけが行われていました。しかもそれに担任がかかわっていました。子どもたちにとって、担任がかかわっていることは注意が引かれやすいものです。したがって、M



子にとっては、スイートポテト作りが実に面白そうなおことに見えたでしょう。そして、それが行われている場所は、M子の身体を自然に引きつけ、M子をいきいきさせてくれる場所です。このときには、M子は自分の存在とこの空間とが違和感無く密着し、一体となったものとして体験していたと言えます。言い換えれば、「自分の存在を支え、可能にしてくれている空間」と感じていたのです。

Y先生にたしなめられたとたん、M子の存在と保育室との親密さはなくなりました。M子と保育室のあいだには隙間が生まれてしまい、M子はその空間から浮き上がってしまったのです。M子はこの保育室が突如として「よそよそしいもの」になったと感じたことでしょう。いわば、M子はこの保育室のなかに「身の置き所がない」思いになっていったのです。したがって、M子にとっては、この保育室は「自分の存在を支えてくれる空間」ではなく、「それに対抗して懸命に自分の存在を保持しようと努めなければならぬ空間」になったのです。

このように、生きられている空間には、子どもの存在そのものにかかわる次元も存在します。空間が「子どもの存在を支える空間」でなくなると、M子がスイートポテト作りができなくなったように、子どもはその空間を「限定的な意味空間」として生きることができなくなります。もろもろの「限定的な意味空間」

は、「存在を支える空間」の上に成り立っていると言えるでしょう。

三、存在次元の空間を左右する保育者

場面二で、M子はY先生にたしなめられて気落ちしてしまいました。この出来事は保育者の存在の大きさを物語っています。

もしも、M子が友だちにたしなめられたのであればそれほど気落ちすることはなかったでしょう。自分をたしなめた人が担任であったがゆえに、M子は大きな衝撃を受けたのです。友だちになにか言われたのであれば、M子は他のところに行って他の遊びをすることもできたでしょう。ところが、場面二では、M子は他のところに行くことなど少しも考えていません。M子はY先生に許しをもらわずにはいられなかったのです。Y先生の許しをもらわなければ、そこで活動することも、あるいは他の場所に行くこともできないので

す。M子は、保育室が「身の置き所のないよそよそしい空間」になってしまったにもかかわらず、そこから出ていくこともできず、そのよそよそしい空間のなかに閉じ込められ、自由を奪われてしまったのです。

M子はスプーンを洗ったあと、Y先生に「スプーン洗った」と報告しました。それはY先生の許しをもらいたかったからであり、締め出されてしまった空間に戻りたかったからです。Y先生はM子のその思いに気づいていたのでしよう。M子に「Mちゃんもそのスプーンでスイートポテト作って」と言ってやりました。その言葉で、保育室が再び「存在を支える空間」に変わり、M子は締め出されていた「料理作りの空間」に戻ることができました。壊れていた担任との関係が立て直されることで、M子と空間との親密さが回復されたのです。

このように、子どもにとって、保育者の存在は絶大な重みを持っています。子どもたちにとっては、自分

が担任とどのような関係にあるかが大きな問題です。その関係の如何によって空間の意味が大きく左右されるのです。保育者は、活動の次元で子どもにも影響を与えているだけでなく、存在の次元でも影響を与えているのです。

(富山大学)

注

(1) シュッツ『社会的現実の問題 II』マルジュ社、一九八五年、三八頁

いる。

今回は、戦前存在した社会事業的性格をもつ幼稚園の問題をとりあげ、保育所と幼稚園の関係について改めて考えてみたい。

幼稚園令がしめたもの

幼保の二本立てをはっきりと制度化したのは戦後の児童福祉法と学校教育法の成立であるが、明治初年から内務省（後に厚生省がわかれる）管轄の託児所などと呼ばれた社会事業的保育施設と、文部省管轄の学校系統の「幼稚園」という保育施設の二つのタイプがあった。

前者は戦後「保育所」として制度化されるまでは国の規定もなく、必要と状況に応じて、目的も内容も形態も様々なものが各地で行われていた。これに対して、後者は、まず中央に国立の幼稚園がつくられ、それをモデルに各地に設置されるという官主導で発展し

利用階層は富裕層に偏っていた。

しかし、フレールベルがドイツで創始したキンダーガルテンの意図は、富裕層の早期教育ではなく、一般民衆の幼児の発達の保障にあった。我が国においても、真に幼稚園を必要とするのは貧しい家庭環境、地域環境におかれた民衆の子どもたちであるという主張があり、そのような幼稚園も実際に存在した。また、大正十五年に制定された「幼稚園令」にはその主張が反映され、幼稚園が保育所的、あるいは社会事業的性格をもつことを時代の要請としておおいに勧めている。

幼稚園令は入園年齢について従来どおり三歳から就学までと規定しつつ、但し書きで特別の事情がある場合合は三歳未満の幼児の入園も可としており（六条）、その背景が「幼稚園令及び幼稚園令施行規則制定の要旨並びに施行上の注意事項」（文部省訓令第九号）で次のように説明されている。

……父母共に労働に従事し子女に対して家庭教育

を行ふこと困難なる者の多数居住せる地域にありては幼稚園の必要殊に痛切なるものあり。今後幼稚園はこの如き方面に普及発達せんことを期せざるべからず。随つてその保育の時間の如きは早期より夕刻に及ぶも亦可なりと認む。又幼稚園に入園せしむべき幼児の年齢に就きては従来の規定と同じく三歳より尋常小学校就学の始期に達するまでを原則とするも特別の事情ある場合に於ては三歳未満の幼児をも入園せしめ得ることとせり。之を外国の実例に徴するに幼稚園に孤児預所を附設するもの少なからず為に特別の事情ある家庭に対し便益を与ふる所頗る大なるものあるが如し。右の規定に依り三歳未満の幼児を收容せんとするには相当の設備を要すること論を俟たずと雖事情の許す限りに於て適当に之を実施するは当今の時勢に照らし亦極めて必要なりと信ず……

(傍点筆者)

社会事業的幼稚園とは

幼稚園令の規定にもかかわらず、その後も幼保二元の大勢はかわらず、幼稚園令の構想は理念倒れに終わったようだ。

しかし、戦前期の東京における保育所や幼稚園の状況を調べるなかで、東京には少なからぬ「社会事業的幼稚園」があったのに気づいた。それは幼稚園令以前にもあったが、幼稚園令により力を得て設立、認可されたものがやはり多い。

ここで私が「社会事業的幼稚園」と呼ぶのは認可を受けた幼稚園のうち、内容が社会事業的であり、かつ社会事業として公的に認められているものである。内容が社会事業的であるというのは①保育時間が長く父母の労働を援ける機能を備えている、②保育時間は一般幼稚園並であるが、貧困層の幼児の保育を目的としたもの、③保育料が低額であるなど、貧困、勤労層の利

表 東京府下の社会事業的幼稚園

名称(所在地)	沿革・幼稚園認可
1 三田幼稚園(芝区三田四国町)	大正4.10認可
2 有隣園幼稚園(淀橋区柏木)	明治44.8開設、大正4.11認可
3 三崎愛の園幼稚園(神田区三崎町)	大正6.3認可
4 和田堀隣保館幼稚園 (杉並区方南町)	大正14.5東京府社会事業協会和田堀隣保館保育部開設、昭和2.10認可
5 尾久隣保館幼稚園(荒川区尾久町)	大正14.7東京府社会事業協会尾久隣保館保育部開設、昭和2.12認可
6 大島隣保館幼稚園(城東区大島町)	大正14.5東京府社会事業協会大島隣保館保育部開設、昭和3.4認可
7 宮代幼稚園	昭和3.4認可
8 福田会亀戸幼稚園(城東区亀戸町)	大正6.10福田会保育園開設、昭和4.2認可
9 愛清館幼稚園(城東区亀戸町)	大正11.9保育園として事業開始、昭和5.9認可
10 菊川幼稚園(本所区柳原町)	大正13.本所ベタニヤホーム幼児託児所開設、昭和6.2認可
11 東京幼稚園(大塚坂下町)	大正14.5四恩瓜生会幼稚部設立、昭和7認可
12 マハヤナ幼稚園(豊島区西巢鴨)	昭和6.4開園、6.6認可
13 愛恵学園幼稚園 (南足立郡西新井本木)	昭和6.9メソジスト派の隣保事業として開園、6.8認可
14 亀有幼稚園(南葛飾郡亀有町)	昭和5.9本田カネにより設立、昭和7.7認可
15 猿江善隣館幼稚園(深川区住吉町)	昭和5.4猿江善隣館の隣保館事業として開設昭和7.8認可
16 子どもの家幼稚園	昭和6.4内鮮婦人会創立、保育部設置昭和9.3認可
17 共励館吾孀幼稚園(向島区吾孀西)	昭和12.3認可
18 梅田上宮館幼稚園(足立区梅田町)	昭和13.1認可
19 コドモの園幼稚園 (世田谷区上馬町)	昭和14.7東京育成園コドモの園幼稚部開設、昭和15.9認可

用を考慮していること、等によって判断する。社会事業として公的に認められていることの目安は、社会事業法（昭和十三年）の適用施設であること、東京府や市の社会事業施設名簿類に掲載されていること、社会事業関係の補助金を受けていること等、である。

このような基準でリストアップしてみると東京には表に示した約二〇か所の社会事業的幼稚園が存在した。

東京都公文書館には、戦前期東京府下の私立学校認可関係書類の分厚い綴りが保存されており、このなかには、幼稚園の認可時の文書が綴じ込まれている。これによって、それぞれの社会事業的幼稚園の設立、認可の際の興味深い状況を知ることができるが、ここではその一部について述べてみよう。

三田幼稚園

明治、大正期に設立され、幼稚園令以前に小学校令

による幼稚園の認可を受けたいくつかの社会事業的幼稚園がある。よく知られているのが明治三年に野口幽香、斎藤峰によって設立された「二葉幼稚園」であるが、この園は大正五年に幼稚園認可を返上し「二葉保育園」と名称変更し、その後は完全に内務省傘下の社会事業としての道を歩む。しかし社会事業的幼稚園として存続し続けたものもあり、これらは幼稚園令以降は同令により設置されたものとみなされた。表中の1、3がそれで、このうち「三田幼稚園」について紹介してみよう。

大正四年九月二八日に申請、十月二一日認可された三田幼稚園の認可願書は次のようなものであった。

幼稚園設立認可願

本会は此度幼児の社会的保護に関する無料幼稚園を東京市芝区三田四国町三十二番地に 開始致し度候間御認可相成度別紙相添此段御願申上候也

大正四年九月廿八日

東京市芝区三田四国町五番地四号

児童少年愛護会

右代表者 同所在 有泉義理作

東京府知事法学博士井上友一殿

名称、位置、目的、其他

- 一 名称 本会設立の子供預り所は 三田幼稚園 と称す

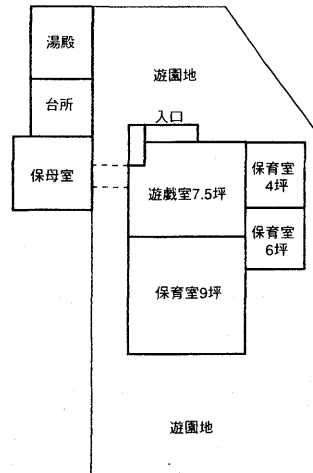
- 一 位置 東京市芝区三田四国町三十二番地

- 一 目的 三歳より小学校に入学迄の子供を預り 父兄に代り(遊戯談話手技唱歌等に依り)保育す

- 一 当所の定員は約五十名と為し保育料は徴収せず但し菓子代として一日二銭以内を納めしむる事あるべし

- 一 開園の予定期日は拾月中旬とす

図1 三田幼稚園



- 一 保育時間は朝食後より夕食前迄となし来園及帰園は父兄及園児の随意とす

以下略

設立者の有泉は慶応義塾大学学生監督で、大正二年四月、自宅を開放して附近幼児のために「子供の家」として開設した。これは自宅の隣家の空家を購入して

園舎に充てた。「目下幼稚園トシテ何等ノ設備ヲモ施シ居ラズ」(東京府視学による調査結果の復命書)という状態であったが、この民家を改造して園舎として利用した(図1)。創立のために購入する物品の予算表も添えられているが、オルガン壹台百円、幼児椅子五十個七拾五円、恩物五十組壹百円等、計四百九十七円が予定されており、これらが「幼稚園」として認可されるための必要備品であったのであろう。

保育時間、保育料などの内容からみて典型的な社会事業的幼稚園であり、このような内容でも、幼稚園として認可されていることは興味深い。目的にある「無料幼稚園」という用語から、米国における幼稚園運動(フリーキンダーガルテン)の影響がうかがえる。

東京府社会事業協会隣保館幼稚園

表の4、11の各幼稚園は、幼稚園令以前に社会事業的保育施設として開設され、幼稚園令により幼稚園の

認可も受けたものである。

幼稚園令についての社会事業界の受け止め方は複雑であり、必ずしも歓迎するものではなかったが、幼稚園令を活用し、社会事業としての役割を果たしつつ、保育内容の一層の充実をはかろうとする立場もあった。東京府社会事業協会の岡弘毅はその旗頭であり、協会が経営する隣保館のうち和田堀、尾久、大島の三館の保育部門が幼稚園としての認可を受けた。

昭和十五、十六年に実施された「本邦保育施設に関する調査」(社会事業研究所・愛育研究所)には幼稚園令と社会事業法の両者にかかわる保育施設の事例として、「尾久隣保館幼稚園」がとりあげられている。幼稚園と託児所は内容的に変わるべきものではない、むしろ保母、設備などに就いては幼稚園程度に整い、そして対象には貧窮なる家庭をとる施設であるべきだ、との考えから、また一方では幼稚園令による便宜(保母の資格取得、待遇等)をも考えて幼稚園令の認

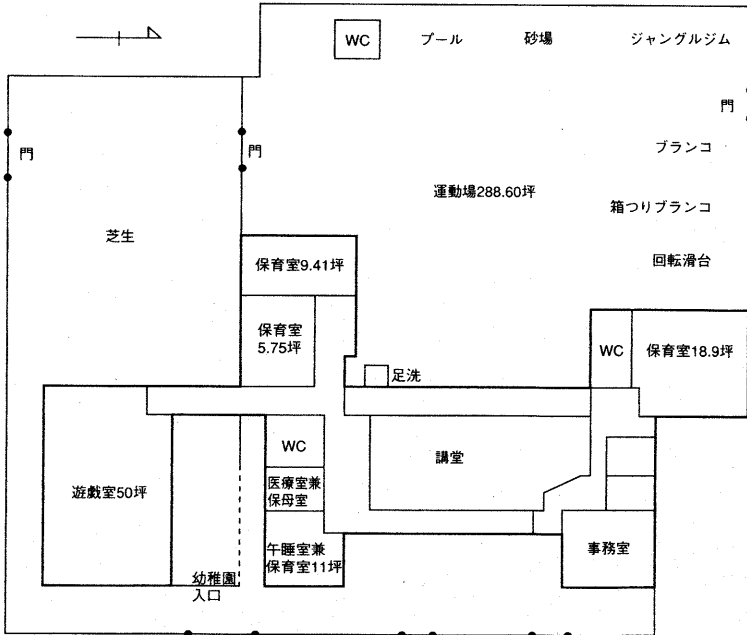
可を受けた、という館長の説明が紹介されている。

猿江善隣館幼稚園

幼稚園令以後設立された社会事業的保育施設で、設立と同時にまたは数年以内に幼稚園認可を受けたものが表の12、19である。

昭和五年に竣工した同潤会猿江アパート構内に様々な地域福祉を行う「猿江善隣館」が開設され、幼児昼間保育部、授産所、児童図書館等の事業を開始した。猿江善隣館幼稚園はこの保育部が昭和七年六月十六日幼稚園としての認可を申請し、八月二三日に認可されたものである(図2)。園の規則の中で「目的及年限」には「本園は満三歳以上尋常小学校に就学する迄の幼児を保育し其の心身を健全に発達せしめ善良なる習慣を得しめ以て家庭教育を補ふと共にそ

図2 猿江善隣館幼稚園



の保護者に対する附近施設と協力して家庭生活を援助し向上せしむるを以て目的とす」とある。保育時間は概ね午前八時より午後四時迄、一般幼稚園と同様に夏休み等もあったが、「保護者家庭の事情に依り必要ありと認むるときは前項休日中と雖も收容保育する」とある。保育所そのものの内容で幼稚園としての認可を受けたものである。

*

東京以外の地域には、「社会事業的幼稚園」はどのくらいあったのであろうか。詳しいことは解らないが、先にみた「本邦保育施設に関する調査」には、幼稚園令、社会事業法の両者にかかわる保育施設として青森柳町保育園（青森市）、岩崎幼稚園（秋田県岩崎町）、南区幼稚園（名古屋市）、笠松幼稚園（岐阜県笠松町）、汎愛幼稚園（大阪市）、市民幼稚園（山口市）、甲子幼稚園（徳島県富岡町）、安田村保育所（香川県

安田村）の八か所が挙げられている。

なにやら断片的な紹介しかできなかったが、戦前期の幼稚園の多様性に注目していただければ幸いである。

（淑徳短期大学）

参考資料

松本園子「戦前期の社会事業的幼稚園」（淑徳短期大学研

究紀要三五号、一九九六）

ある日の育児日記から

(84)

佐藤 和代



ある日、有が突然言い出しました。「ゆうねー、ゆうって名前、やめた。えっ、だって、やめてどうするの?」「違う名前がいい」何ていう名前ならいいの?」「しんいち」。

うーん、何を考えているんだか。そして次の日、「ゆうねー、さとうって名前もやめたよ」。あのね、名前って、勝手にやめたりつけたりできないのよ。と説明してみますが、馬の耳に念仏、五歳児の耳に社会常識…。

この状態はしばらく続き、「ゆうくん」と呼び掛けると「違うでしょ、しんいちでしょ」と言う

始末です。二歳のころは、何でも「自分でする」と言って困らせたものだけど、やっとないていのことは自分でさせても大丈夫、となったらこれだわ。

有はとにかく「自分でする」と言ってゆずらないことが多い。まは今でも洋服を選ぶとき「お母さん選んで」なのに、有は私が出した服は決して着ない。もう一度自分でたんすから出します。(忙しい朝のけんかのモト!)ま、自立心の表れだから…。と無理やり納得して、しばらく「しんいち」につきあいますか。でもねー、近所の人に「ぼくはしんいちって名前になりました」なんてふれまわったらどうしよう。



まが親の本棚に進出!
ヤバイ本はかくさねば。

滄桑の街・香港から(1)

香港到着

一九九七年四月一日、私たち家族は、歴史的な返還を目前に控えた香港啓徳空港に到着しました。主人の転勤に伴い、約二年の予定でホットな街・香港で暮らす事になったからです。

近いとはいえ、異国での生活ですので、親として小学三年生及び一年生の娘たちの健康面、安全面、環境面で気を配っていたものの、当事者たちは、まるで旅行にい

今井 七重

くかのようなので、転勤の話が出てから終始ご機嫌でその日を迎えました。

一番の懸念だった小学校の選択には三通りありました。現地校（広東語を主とする）、インターナショナル（英語を主とする）、及び日本人学校です。当初、せっかくの海外だからとインターナショナルも考えていたのですが、海外子女教育財団の方や実際海外にいらしている同世代のお子さんをもっている方々に相談した結果、日



本人学校に決めました。二人の娘がまだ、小学校中低学年であり、日本語が確立していないこと、二年間という時期が英語をマスターするには短かすぎる事、仮に英語をマスターしたとしても、日本に帰れば、すぐに忘れるし、マスターした英語は、あくまで小学生レベルでの話し言葉に過ぎない事、日本語をある程度確立してからの方が、第二言語の習得は効率的である事、子どもたちの第一言語を日本語とするなら、今の時期の日本語はとても重要である事等勘案したからです。英語に固執するより言葉に不安のない環境の中で、のびのび生活しながら日本とは違う様々の面を、肌で感じるの方が重要だと考えました。

香港には既に三十年以上の伝統ある香港日本人学校（在香港島）がありますが、年々増加する生徒数に対応できず、ここにきて限界（一学年六、七クラスもあります）、八年前から新設校の建設を考えはじめ、今年度よりやく香港日本人学校タイポール校開校の運びとなりました。吐露灣を臨む緑豊かな広大な敷地、とても小学校と

は思えない雰囲気をもった贅沢な建物もさることながら、新設校の一番の魅力は、国際学級（英語による外国のカリキュラムに基づいたクラス）を併設していることです。一国二制度の香港らしく、一校二学級制です。こちらは九月開校ですが、各学年一クラスから二クラスの国際学級を予定しています。日本語学級の生徒たちも早朝、休み時間、昼食、清掃等を一緒に過ごす事で、異文化に少しでも自然な形で触れる事ができます。又、夏休み以降、日本語学級で図工のイマージョン教育も行われる事になっています。ともすれば、これだけ多くの日本人がいては、ついつい居心地のよい日本人とだけの付き合いだけで終わってしまいがちな欠点を、補ってくれます。言葉の習得よりも、一緒に過ごす事で、異文化を自分の目で見て、肌で感じて、そしてその違いを拒絶するのではなく、認め理解できるように努めてくれればどんなにいいかと迷わずタイポール校を希望し、入学・転入が許可されました。

こんなにすばらしい環境なのだから、もしかすると人

気殺到で入れないかもしれないと思っていました。タ
イポー校の地理的条件が嫌われ、各学年二十五名から三
十名の二クラス編成のスタートとなりました。ここは、
九龍半島側の新界といわれるかなり辺ぴなところにあり
ます。どこへ行くにも（海でも、日常の買い物でも）三
十分もかかれば、遠いという香港において、三十分強の
通学は、問題外というわけです。その上、スクールバス
ストップが私たちの住んでいる香港島では一か所しか
ないため、その近辺に住んでいない人は、やはり断念せざる
をえない状況です。なにも知らず、ただただその学校の
魅力でタイポー校に決めた私たちは、かなりの変わり
者（勇気がある）のようです。事実、一か所しかないバ
スストップまでは徒歩圏内ではないので、毎日車で子ど
もたちをそこまで送迎しています。

こちらの学校の子どもたちは、ほとんどスクールバス
で通っています。現地の人たちもそうです。（ちなみ
に、現地校は生徒数と限られた場所の関係で、午前クラ
スと午後クラスの二部制が多く、一日二回スクールバス

による小規模な渋滞が見られます。）坂も多いので子ど
もたちのバス酔いを心配していましたが、問題ありませ
んでした。同じバス停の利用者が一台のバスに乗るた
め、学年を超えてのお友だちができ、三十分のバスドラ
イブをとっても楽しんでいます。子どもたちは、快調なス
タートをきりました。

私自身は、香港滞在二年という限られた期間ですの
で、できるだけ、色々な事を経験したいと考えました。

七時三十分の子どもをバス停まで送り届け、お迎えの三
時四十分迄は、まるっきり自分の時間です。日本からの
来客に備え、ツアーコンダクターのように現地を知り尽
くそうと、ガイドブック片手に観光名所を巡り、一人ト
ラム（路面電車）の始発から終点までのり、変わりゆく
風景を楽しんだりしています。はやりのフットマッサー
ジ・足踏みマッサージにもトライしました。

でも今一番の興味は、街市がしとよばれるマーケットで
す。香港には、日系デパートが多く、日本のものは何で
も、五割増し位で手に入ります。買い物に不自由はない

のですが、ビルの中、ときには平屋の建物の中に魚屋、八百屋、肉屋、乾物屋、漬物屋、豆腐屋、等が所狭しと並んでいて、安くて新鮮、パックではなく量り売りをする街市が、いかにも香港らしくて好きです。

しかし、難点は、臭いです。魚や肉、独特の香辛料等がミックスした形容しがたい強烈な臭いが、かなり離れたところからでもわかります。まず、それに耐えながら一歩足を踏み入れますと、巨大な肉の固まりが、天井から、いくつもつるされた光景やブタの足に圧倒されまゝ。鶏が生きたまま、ぎゅうぎゅう詰めでかごに入れられ、ギャーギャー恨めしそうに泣いている横で、買い物客の選んだ鶏の頸動脈をスパッと切り、ゴミバケツに投げ込んでいる光景には肝をつぶします。魚はびちびち跳ねていて、盛った籠から飛び出し、地面へ勢いよくジャンプしています。ある時、籠の中でもじゃもじゃ動くものが出て、何かしらとしゃがみこんで目をこらした途端、ひっくり返りそうになったことがあります。食用ガエルが山のようにいたのです。エビを買った時などは、

自宅に帰るまでの間、ビニール袋の中でゴソゴソ動いて、その度に手からおっこしそうになります。もう大丈夫だろうと調理しかかった途端、飛び跳ねられ心臓が止まりそうになった事もあります。びっくりすることの連続で、かつ会話は広東語が主流のため、できない私としては辛いものがありますが、現地の人たちと交流できる場所の一つです。今後も多いに利用したいと思っています。

七月一日より香港は、中国に返還されました。政治的には色々あるのですが、日常生活には全く変わりがなく、まるでそういう事実があったことすら忘れる日々です。

これからも、一主婦の見た香港の様子を綴っていきたいと思います。

(元幼稚園児の母)

幼児の教育 第九十六巻 (平成九年) 総目録

◇一号

二十一世紀にむけて幼児教育を考える(10)

人間らしさの回復

秋山 和夫

初めてのオーケストラ

相葉 武久

震災後の子どもたち(13)

中学生とボラ

ンティア

増田 喜昭

子ども時代と私(5)

私の小学生時代

わたしの とった

湯沢 雅彦

ある日の育児日記から(73)

谷脇のぞみ

障害の考え方、半世紀の変化

佐藤 和代

子どもたちへのまなざし(22)

松井 とし

四季の庭・四季の道

正月の花

東欧の子どもたちと幼児教育(4)

浅山 英一

家族を描く

杉本 裕子

外国の文献から『心情と知性の教育―日本の就学前と小学校教育に関する考察』

第六章

榎田 智子

◇二号

ある日

二十一世紀にむけて幼児教育を考える(11)

「子どもの論理」による子育て

小川 剛

子どもたちの中の自分

宮里 暁美

アフリカの国で

榎田 正子

トボスにおける発達

第十二回

原体験としての幼児期

無藤 隆

ある日の育児日記から(74)

佐藤 和代

私に現象学的教育学を教えてくれた人

津守 真

私のハ図工V事始

永倉みゆき

保育者の省察

吉村 香

保護者会が創る観劇会

永野むつみ

子どもの本から

「ことば」を食べる

仲 明子

外国の文献から

小倉 定枝

第七章 子どもの学び

小倉 定枝

◇三号

保育現場と学問の交流の中で

長山 篤子

人形劇で育つ子どもたち

小林 美実

子どもたちへのまなざし(23)

松井 とし

保育の窓(6)

原口 純子

障害をもつ子どものひとりひとりに応

援団を『川を渡る』を読む

津守 真

場になれる

佐藤 寛子

震災後の子どもたち(14)

結実 森末 哲朗

ある日の育児日記から(75)

佐藤 和代

病原性大腸菌O-157とわが家

武田 京子

外国の文献から

第八章 よい学校とは？

吉村 香

二十一世紀にむけて幼児教育を考える(12)

こころ豊かに暮らせる世界を

◇四号

揺らぐ心と洗われる心

黒川 建一

子どもの生活と福祉の歴史(1)

鍋島 恵美

育児室の子どもたち

養育院

松本 園子

松本 園子

現象学から保育の世界を見る(1) 園空
間に住みつくことと他者のまなざし

身辺雑感
榎沢 良彦
津守 真

ある日の育児日記から(76)
震災後の子どもたち(15) あのときの……
佐藤 和代
田辺 克之

あそびはらっぱものがたり
すとうあさえ

保育現場と学問の交流の中で その二
長山 篤子

お母さんのまなざしとケンの日
吉川はる奈

◇五号
ある日

「児童の世紀」を振り返る その一
本田 和子

震災後の子どもたち(16) 自然・気づき
浅野みよこ

子ども時代と私(6) 手作りのぬくもり
千羽喜代子

大きくなった子どもとつきあう

ある日の育児日記から(77)
特集へ慣れる▽
津守 真
佐藤 和代

焦らず ゆっくりと!
一年生が慣れるまで
内村真奈美
橋本 由美

慣れるには考えることと時間が必要
「慣れる」その前に
森兼千枝子

二年間を振り返って
在外子女の異文化対応の諸相
鈴木 洋
小島 由希

気になるということ
吉岡 晶子

◇六号
ある日

現象学から保育の世界を見る(2) 保育に
おけるまなざしの在り方
榎沢 良彦

子どもの生活と福祉の歴史(2)
里親・里子
松本 園子

震災後の子どもたち(17)
テントがブルーや
守 恵一

大きくなった子どもとつきあう(2)

逆統合保育の幼稚園
四季の庭・四季の道
大蔵みどり
水草をたのしむ
池をつくるう
浅山 英一

保育現場と学問の交流の中で その三
ある日の育児日記から(78)
『育児日記からの子ども学』を読んで
長山 篤子
佐藤 和代
浜口 順子

◇七号
ある日

二十一世紀にむけて幼児教育を考える(13)
具体的体験世界の中での人間形成を
小川 博久

「児童の世紀」を振り返る その二
本田 和子

子どものいる暮らし―男・夫・父
父親失格?
山本 政人

子ども時代と私(7) 私の中学生時代(1)
湯沢 雅彦

ある日の育児日記から(79) 佐藤 和代
幼児期の水遊びと大人になってからと 津守 真

あそびはらっぱものがたり

すとうあさえ

震災後の子どもたち(77) ゆさぶられて

穴井 重行

「シンデレラ」を読み替えること

渋谷 真樹

子どもの視線

上坂元絵里

◇八号

保育における「記録」について思うこと

佐木みどり

現象学から保育の世界を見る(3)

保育における相互性

榎沢 良彦

子どもの生活と福祉の歴史(3)

父子家庭と父子ホーム 松本 園子

ある日の育児日記から(80) 佐藤 和代

ブランコをこぐ 津守 真

特集「緑蔭図書紹介」

『遊びと日々』

西頭三雄児

『子どもの世間』 篠塚 英子
家族の再生の道を探って 伊集院理子
戦争の時代を生きた少年たち 田嶋 一

『ムーミンパパの「手帖」』他 藤津 麻里

保育現場と学問の交流の中で その四 長山 篤子

◇九号

ある日

二十一世紀にむけて幼児教育を考える(14)

折り返しのできる世に向けて 森下はるみ

娘が「選んだ」幼稚園 倉田 知子

子どものいる暮らし 子どもが出来て

子どものありがたさを知る 西原 彰宏

「児童の世紀」を振り返る その三

韓国の伝統芸能の今 本田 和子

子どもの世界の表と裏 小林 美実

子ども時代と私(8) 私の中学生時代(2) 津守 真

『遊びと日々』

湯沢 雅彦

夢の日々(一)二人で入園し、三人で卒園

大多和 檀

子どもの本から 秋風が教えてくれた

木の秘密 美谷島いく子

心に添う 田中三保子

ある日の育児日記から(81) 佐藤 和代

◇十号

ある日

二十一世紀にむけて幼児教育を考える(15)

自然はなれの生活と子どもの未来

山内 昭道

保育学文献賞を受賞して(一)

『子どもの人間観』について 落合 正行

現象学から保育の世界を見る(4)

子どもにより生きられている保育室

榎沢 良彦

子どもの生活と福祉の歴史(4) 戦前の

遊び場問題と遊び場づくり 松本 園子

はがす 津守 真

ある日の育児日記から(82) 佐藤 和代

子どもたちの音楽の楽しみ方 山田 陽子

四季の庭・四季の道 子どもにも楽し

める秋植え球根

浅山 英一

環境を通して行う教育

原口 純子

我が家の「ジョージ」骨折する

吉川はる奈

◇十一号

ある日

保育学文献賞を受賞して(2) どうした

はずみか家族になつて 福田 優子

「児童の世紀」を振り返る その四

本田 和子

保育者の好ましい語りかけ 豊永家壽子

子どもが大人になるとき 津守 真

子ども時代と私(9) 疎開先で 小宮山洋夫

ある日の育児日記から(83) 佐藤 和代

夢の日々 二人で入園し、三人で卒園(一)

大多和 檀

年長組の一学期を終えて思ったこと

高橋 陽子

あそびはらっぱものがたり

あき

すとうあさえ

◇一二号

二一世紀にむけて幼児教育を考える(10)

幸せに生きる力の「根」を育てる

岸井 勇雄

保育学文献賞を受賞して(3) 『教育力の

原点』で言いたかったこと 谷 昌恒

「ヘンシーン！」その一瞬に出会うとき

射場美恵子

J・W・トレントJr.著 『精神薄弱』の誕

生と変貌』を読む 津守 真

子どもと時間 芹沢 澄子

現象学から保育の世界を見る(5) 生きられ

る幼稚園空間の二つの次元 榎沢 良彦

子どもの生活と福祉の歴史(5)

松本 園子

社会事業的幼稚園 佐藤 和代

ある日の育児日記から(84) 香港到着

今井 七重

第九十六巻総目録

幼児の教育

第九十六巻 第十二号

(一九九七年十二月号)

定価四六〇円(本体四三八円)

発行 平成九年十二月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112東京都文京区大塚二一―

印刷所 図書印刷株式会社

お茶の水女子大学附属幼稚園内

〒108東京都港区三田五―二一―

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113東京都文京区本駒込

六一―四一九

〇三―三五三九五六六一三(営業

部) 〇三―三五三九五六六〇四(編集

振替) 〇〇―一九〇―二一―九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館にお願いします。

伴奏なんかこわくない

あそび歌からはじめるピアノ、ギター伴奏術

◆繁下和雄 著



楽器の扱いが苦手の保育者向け。ピアノ、ギターなどこれ一冊をマスターすれば、いろいろな曲が簡単に弾け、ほとんどのあそび歌の伴奏ができるようになる。



B5判 96頁 定価 本体2,200円+税

おはなしマジック

一妖精から贈られた魔法の粉—

◆あんざき こういち 著



だれでもできるやさしい手品を紹介。お誕生会やいろいろな行事の集会などに効果のあるマジック特集。

しかもマジックがおはなし形式で構成され、子どもはもちろん大人にも十分楽しめる。

●内容

三匹のこぶた	ゴンドラこん	だらんだらん
三日月のペンダント	ヒツジとオオカミ	にんじんきらい?
ぴっぴっぴっ	ジャックと豆の木	星に願いを
王子ミグルーシャ		

B5判 96頁 定価 本体2,200円+税

キンダーブックの
フレーベル館

フレーベル館創業90周年記念出版

付：外国の保育・教育 40か国

現代 保育用語辞典

基本的な保育用語約2,000語を精選、50音順に配列し、解説。

弊社創業90年・「キンダーブック」創刊70年を記念し、21世紀を視野に入れた情報源・知識源「現代保育用語辞典」を企画いたしました。新しい時代に対応する常備書として、皆様のお手もとにご用意いただければ幸いです。

保育を語る時に欠かすことのできない基本的な用語、新しい保育観・子ども観から出てくる言葉などを通して、これからの保育のあるべき姿を分かりやすく示す辞典。

みだし語は英語訳付きで、今の保育に直結する語釈をポイントとし、引きやすく、意味がすぐ確認できる辞典。

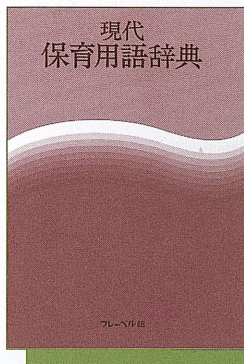
編集委員

岡田正章・千羽喜代子・網野武博・上田礼子・大戸美也子
大場幸夫・小林美実・中村悦子・萩原元昭

執筆者

保育及び隣接分野の最高権威者330名が参画。

A5判・592頁・定価 本体7,767円 + 税



保育の基本〈全6巻〉

21世紀の保育を見つめて、今、保育の基本を問い直す。

幼稚園教育要領や保育所保育指針の中で示されている「保育の基本」は、さまざまな形に受容され実践に移された。しかし、そこに誤解に基づく混乱はなかったか。本シリーズは、具体的な事例を通してその混乱をただし、あるべき保育の姿を提案します。



- ◆第1巻 環境を通しての保育とは
- ◆第2巻 生活と遊びを通しての保育とは
- ◆第3巻 個と集団を生かす保育とは
- ◆第4巻 自由の中で規律が育つ保育とは
- ◆第5巻 発達に合わせて援助する保育とは
- ◆第6巻 総合的指導による保育とは

編集委員 森上史朗 (青山学院大学教授)
高杉自子 (子どもと保育総合研究所)
今井和子 (東京成徳短期大学助教授)
後藤節美 (別府市・石垣幼稚園長)
田中泰行 (東京都・向南幼稚園長)
渡辺英則 (横浜市・港北幼稚園副園長)

- 今特に問題となっていることを各巻のテーマに
- 子どもに寄り添う保育を●これからの保育への提案

A5判・各216頁・セット定価 本体12,000円 + 税

キンダーブックの
フレーベル館